



# CIF JAPAN

NEWSLETTER No.33

<http://cif-japan.papnet.jp/>  
[cifjapan08@gmail.com](mailto:cifjapan08@gmail.com)

## Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン事務局長 坂本正路  
編集人 同 坂岡隆司 発行日 2015年4月30日  
事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館  
Tel.075-574-2800 Fax 075-574-0025

## 国際交換研修プログラム (IPEP)の開始にあたって

理事長 竹内 和利

いよいよ CIF ジャパンにとって新しい展開を迎える年を迎えました。

ご承知のとおり昨年5月、東京での定例総会において、初の国際交換研修プログラムの開催を2015年10月に京都で行うことを決めました。直ちに CIF 国際事務局にも実施の申し出を行い、8月末のチュリッヒでの CIF 代表者会議において実施を発表いたしました。けれども実施を各国に発表をしたものの、それはあくまで予定であり、プログラムを開催するための財源は未確定のままです。その後国内三つの財団宛に助成金の申請を行い、本年3月一杯まで決定を待ちましたがいずれも願いはかなえられませんでした。やむなく開催中止を決めようとしていた矢先に、坂本副理事長のご尽力により、公益財団法人愛恵福祉支援財団より貴重な助成を戴くこととなり、お蔭様でここにめでたくプログラム開催への扉が開かれました。後日同財団法人の濱野一郎理事長様はじめ役員の皆様のご理解とご好意に対しまして、書状の上ではありますが、厚く感謝をお伝え申し上げた次第です。

開催までの時間が当初の計画よりもたいへん短くなりましたので、早速4月はじめには CIF 各支部宛にプログラム参加者募集広告をメール送信し、また国内の研修者を受け入れていただく団体にも、改めて実施のお願いをお伝えしました。今後は、会員各位のご協力とご支援を仰ぎ、必要な準備態勢を整えて参りたいと思います。

この機会にプログラムについて少しご説明させていただきますと、初の国際交換研修の実施に当たり、諸外国のプログラムの様子を少し調べました。参加者はほぼソーシャルワーカーで占められ、前半は主催国の社会、文化、福祉を共通テーマとする学習が基本で、後半は参加者

の希望する研修先を任意に応募段階から選ぶというやり方です。例外は CIF オランダ支部がここ数年「アウト・リーチ」をテーマに定めて実施しています。アメリカの CIF プログラムではソーシャルワークはもとより、病院管理、行政事務、更には証券会社まで広範な受け皿がありました。CIF ジャパンの現状では応募者の希望に沿う多岐に及ぶ研修先を探すことは不可能ではないにしても、時間的に困難が予想されます。そこで手始めに「ソーシャルワークと日本の社会福祉サービス」をテーマに掲げ、研修先に高齢者、知的障害者、精神障害者に対する在宅ケアと施設ケアサービスを展開しておられる京都市内の4つの社会福祉法人にお引き受けをお願いしました。また同志社大学社会学部では日本の社会福祉の歴史と現状を中心に、木原活信教授はじめ教員方による講義と、大学院生を交えた意見交換の時間を設けていただく予定です。

会員各位には研修施設現場、大学、社会見学、京都・奈良観光、歓迎会、反省会、送別会などで、研修生との交流や意見交換の機会に参加して頂ければと思います。

さいごに、今更申し上げるまでもなく、CIF の理想は、国際研修と異文化交流による専門的能力の向上を通じて、国際理解と世界平和の推進を図ることです。初の国際交換研修を始めるにあたり、来日する研修生がいずれの国の人であれ、研修の成果とともに相互に理解と交友を深め、CIF の理想実現を目指したいと思います。

### IPEP プログラムへの補助金受給の経過報告

副理事長・事務局長 坂本 正路

今回、愛恵福祉支援財団(以下、財団という)が IPEP プログラムを支援することを決定いたしましたので、その経過を紹介させていただきます。

○2014年11月13日

私(財団の海外研修委員)と CIF の財務担当理事の梶村慎吾さんとで財団本部(東京駒込)

を訪問して、常務理事の杉浦孝夫氏と理事の遠藤久江氏にプログラムの概要(資料9種類)を説明し、支援を頂きたい旨、お願いした。しかし、①前例がないこと②先ず単独でプログラムを実施してから申請すべきである③会員の寄付をまず仰ぐべきである、等の理由により受理されなかった。

#### ○2015年1月22日

財団の行っている『介護関係職員海外研修』(オーストラリアの老人ホームでの現場実習研修)の成果と計画に関する会議の際、理事長 濱野一郎氏にIPEPを説明し、プログラムの必要性を理解していただけた。

#### ○2月17日

財団の理事会に対して文書で「本財団は海外への研修に多大の成果を上げているので、ここで海外の福祉専門家を招いて行う研修の実施または支援が必要ではないか」と訴えた。理事のおおむねの理解を頂いたが細部についての確認が求められた。

#### ○2月20日

理事会から出された質問に対して、プログラムの内容について回答した。

#### ○3月9日

財団の評議委員会においてIPEPプログラムを支援することが認められ、理事会にその決定事項が送られることとなった。

以上が大まかな経過ですが、最終的に次回理事会において補助金額の決定が行われると思います。なお、今後の準備の進行状況や経費の収支の計画などを逐次報告することによって、さらにIPEPプログラムに対する理解を深めていただけるものと思っております。

## 平成26年度秋季講演会開催

恒例となったCIFジャパンの講演会は、昨年11月29日午後2時から京都市山科区のからしだね館地下ホールで開催されました。講演会は坂本副理事長の司会により、はじめに例年どおり竹内理事長によるCIFおよびCIFに関する紹介が行われ、引き続き講演に移り、今回は手話通訳の必要な方が会場に見えたので、当初のプログラムを急遽変更し最初に橋本妙子さんの「日本の手話、アメリカの手話～手話の世界から見えてくるもの～」と題するお話をお聴きました。後日講演の内容をお寄

せくださいましたので、感謝致しつつ本紙に要旨を掲載させて頂いています。皆さん是非お読みください。

コーヒープレイクを挟んで、「保健師がみたオーストラリアの福祉～CIF 交換研修報告」と題して、既にCIFジャパンのメンバーとなられた保健師・精神保健福祉士、佐野富子さんにオーストラリアでの研修中の写真を見せていただきながら、研修中の楽しさやご苦労話を聴かせて頂きました。講演会の参加者は15名ほどでしたが、楽しい雰囲気のもとで有意義な時間を皆様に提供できたと思います。

以下、講演記録を掲載します。なお、佐野さんの講演記録は前号の研修報告と重複しますので省略させていただきます。

### 日本の手話、アメリカの手話 ～手話の世界から見えてくるもの～

手話通訳士 橋本妙子氏

#### 《手話との出会い》

次男の授業参観で教室の片隅で話さろうのお母さんと手話通訳者を見て、私も手話で話したいと思った。

1991年京都市手話学習会「みみずく」へ入会。それから手話の魅力に取りつかれて25年余り。手話サークルで手話を学び始めて3年目に京都



府聴覚障害者協会の専従職員になった。日常会話がやっとのレベルでの無謀な挑戦だった。バスを乗り換え遙々事務所に来

られたろうの方が私をみて、「あんたか…しようがない、またくるわ」と用事も言わずに帰ってしまわれることもあった。手話が通じなければ仕事はできない、信頼も得られない。心底手話が上手になりたいと思った。出会うろう者すべてが手話の先生だった。手話だけでなくろう者を取り巻く様々な問題も見えてきた。

#### 《専従職員としての12年間》

協会の専従職員としての体験は今の私にとって大切な宝物。仕事としてアジアろう者リーダー研修会の担当をした時、国際手話を学ぶ機会があった。その当時の研修生だった女性に昨年ベトナムで再会しました。私のことを覚えていてくれたことも嬉しかったのですが、よりよい

社会を目指すためにろう者のリーダーとしていきいきと活動する姿が忘れられない。その研修担当中、橋本は英語が話せるらしいと思いがけないオファーがあった。JICAの事業で「タイの手話辞典」をバックアップする全日本ろうあ連盟の理事の同行通訳だった。今思えば、日本手話も国際手話も英語さえもまだ私の私に、よく依頼してくださったものだ。でもタイでの経験が英語と日本手話の通訳という未知の領域への扉をあけてくれた。ろう者の海外旅行の通訳も頼まれるようになった。

### 《京都アメリカ手話サークル》

2004年に京都でASL(アメリカ手話)講座が開催されることになり受講した。講師はアメリカのろう者でその指導法は素晴らしかった。ASLでASLを教えるのだ。当時、京都の手話通訳者養成講座では聴こえる講師が主になって音声を使っただけの指導。入門講座では実技はろう者が教え、その手話を読み取る(日本語に通訳する)指導法だった。受講生は手話を観ず、聞こえてくる日本語に頼ってしまっている。何よりASLは言語学的にも確立されていて、指導法も学ぶべきところが沢山あった。翌年修了生(全員ろう者)と京都アメリカ手話サークルを設立した。そこでの言語は日本手話とASL。ASLを学ぶ時はろう者、健聴者の垣根はない。

2008年にニューヨーク、2010年にはワシントンにあるギャロデッド大学へと研修旅行へ。ニューヨークではニューヨーク市立ラガーディアコミュニティカレッジの手話通訳養成コースで2日間の研修をした。ギャロデッド大学では多国籍の学生達との交流もでき、大学の通訳スタッフの支援体制をつぶさに見ることが出来た。2012年マカオで、2014年にはベトナムでのろう者との交流。英語と日本手話の通訳としてお役にたててうれしかった。

### 《手話の魅力》

手話は観る言葉。音声言語は国が違えば通じない。もちろん手話も国によって違うが、手話の持つ特性である表情や写像性などにより通じてくる。その手話の魅力を皆さんに知ってほしい。

### 《手話を通して見えてくるもの・そして問われる自分自身》

魅力ある手話を言語とするろう者から日本の社会が見えてくる。ニューヨークのメトロポリタン美術館にはろうの学芸員がいて、ASLで美術品の解説をしながら案内してくれた。また、ワシントンでは案内してくれたアメリカのろう

女性がナショナルギャラリーにデフペインターの部屋があると言うのでついでとゴヤの展示室だった。中途失聴の画家ゴヤに対する尊敬。またリンカーン像を作成したのはdeafであり、リンカーンの両手の指は指文字のAとLを表していると誇らしげに案内してくれた。アメリカでも偏見や差別はあったそうだが、今ではろう者はASLを、ろう文化を誇りにしている。日本はどうだろう?ギャロデッド大学で学ぶ日本のろう者が言った。「ここで学んだ児童心理学をいかして日本でも子供達に関わる仕事がしたい」彼女が日本で心理療法士として働く環境は整っているだろうか?また、未就学や無年金のろう者がいることをご存じでしょうか。結婚してもなかなか子供ができず病院で見て貰ったら知らないうちに親から不妊手術をされていた夫婦。ある時、未就学のろう者が血相をかえて私の家へ来て、一緒に交番に行ってほしいと頼まれた。聞くとスーパーのトイレに財布を忘れた、気づいて戻ったがもうなかったという。交番のお巡りさんは届を受理する際に、財布の中にあったという金額の出所はと質問されました。彼が通帳からおろして財布に入れたという、その通帳を見せてと言われた。私は激昂し、そんなおかしいことはない、もし、これが橋本自身だったらそんなことは要求されないしこんな理不尽なことはないと抗議した。



例を挙げればきりがなくらい、ろう者を取り巻く日本の社会はまだ未成熟だ。ろう者への理解

を深め、手話を広げでいき、ろう者がいつでもどこでも安心して暮らせる社会を作るために通訳者としてできることを私なりに発信し行動していきたいと思っている。

当然、通訳者としての活動は通訳士倫理綱領に基づいて行わなければならない。通訳者である前に、自分自身の生き方、在り方が問われる。支援が必要なろう者には支援を。寄り添ってほしいろう者には自然に肩に手が添えられる自分でありたい。情報保障があれば自己決定もできるし、海外旅行もいけるろう者とは一緒に楽しみ、学びたい。これからも一人の人間として自然にろう者とともにありたいと願っている。



